

ジュニアキャンパス 2011

日時 平成23年9月18日(日) 14:30～16:00

場所 京都大学女性研究者支援センター

参加者 京都市およびその近郊の中学生

今年度も、京都市教育委員会との共催で、「京都大学ジュニアキャンパス」が開催されました。本事業は、中学生に学問の最先端の現場に触れてもらい、将来学びたいことについて考えるきっかけを作ることを目的としています。今年度のテーマは、「世界から日本を診てみよう」です。未曾有の災害を経験した日本の再建・復興、未来を考え、中学生とともに、外の広い世界から日本を眺め診断することを目指しました。「原子力発電のない暮らしを考える」、「地震学」、「留学生とともに世界の環境問題を考えよう」など、さまざまなゼミナール形式の体験型学習が行われました。

女性研究者支援センターは、伊藤公雄教授（文学研究科）と、センターが前期に実施したポケット・ゼミ「ジェンダーと科学」の受講生、ポケゼミOB生が講師となり、ゼミ「大学生と語るジェンダー（「男らしさ」「女らしさ」などの社会的性別）」

を実施しました。女子4名、男子4名の中学生が参加しました。遠くからは、浜松市立の中学校に通う女子生徒も参加しました。

はじめに、女性研究者支援センターの待機乳児保育室、相談室などを見学しました。伊藤教授からは、本施設が誕生した経緯と背景、日本の男女共同参画施策について説明がありました。また、世界経済フォーラムによるジェンダー・ギャップ指数、職業と性別の問題などについて講義が行われました。

次に、ゼミ生がファシリテーターとなり、2グループにわかれ、ワークショップ「雑誌／アニメの分析を通じて考えるジェンダー」を行いました。ゼミ生の軽快な自己紹介によるアイスブレイクで、最初は緊張していた中学生もすぐ打ち解けました。雑誌のなかの女性像／男性像を切り抜き、模造紙に貼りつけ、完成した作品を壁に貼り、グループごとに議論しました。男女の表現され方の違いについて観察し、発見したことを記録し発表していました。表情、ポーズ、目線、肌の色、光のあて具合、メガネ、スポーツなど様々な角度から論点が導き出されました。

最終セッションでは、子供向けテレビ番組のキャラクターにみる男性・女性キャラクターの登場回数や特徴などを分析し議論しました。自由懇談の時間には、受験や進路、キャンパス・ライフなどについて中学生から質問を受け、ゼミ生が回答しました。今後も、女性研究者支援センターは、次世代向けの活動を継続していきます。11月6日に開催する「女子高生・車座フォーラム2011」においても、ポケット・ゼミ生がファシリテーションを行います。



女性のための相談室 開室日 【要予約】

[10月] 7日、14日、21日、27日 [11月] 4日、10日、18日、25日 [12月] 2日、9日、16日、22日

研究・実験補助者雇用制度

■制度について

連続したデータ収集が必要なのに保育園のお迎えの時間が・・・産休中もマウスを使った実験は中断できない・・・介護で時間の余裕がまったくないが長年手掛けてきたデータベースを今年度中には完成させたい・・・。

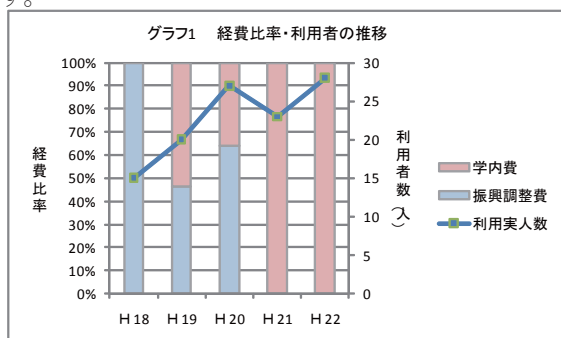
育児や介護中の研究者・教員にとって、一日数時間の時間のやり繰りが可能であれば、あるいはほんの少しの研究・実験補助があれば、研究・教育を中断せずに生活と研究を両立できるのに、と思うことが度々あります。またこうした日々の積み重ねが、研究者としてのキャリア形成・展開に大きな意味をもつことも珍しくありません。女性研究者支援センターでは、設置初年度の2006年から「研究・実験補助者雇用制度」を導入し、育児や介護中の研究者・教員を対象に、研究や実験の補助者の雇用を支援してきました。とくに、科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業の予算に本学の独自財源を加えることによって、女性だけでなく男性にも、また理系・医系だけでなく人文・社会科学系の研究者・教員も利用できる、全学的な、そして利用者の視点にたった制度として拡充・運用を図り、振興調整費が終了後も本学の独自プログラムとして実施しています。

導入後、約4年（年間2回の公募により10期）を経て、制度は広く定着してきました。この間利用者数は延べ171人、その研究分野や所属する部局も広い範囲にわたっています。補助者雇用にあたっては、申請者が所属する部局の全面的な理解と協力が大きな力になりました。また、制度を利用した方には、各期ごとに、利用状況や補助者雇用によって得られた研究成果に関する報告を提出していただき、制度の透明性確保と効果の確認を行っています。

■研究・実験補助者雇用制度：5年間の歩み

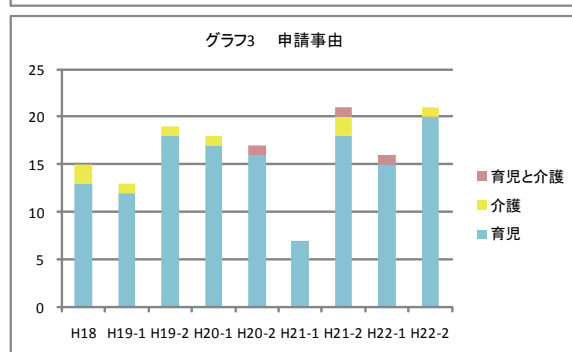
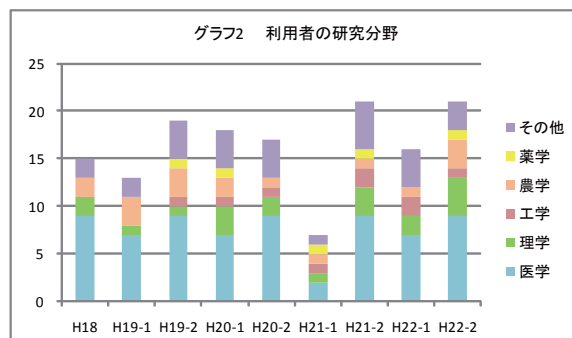
（1）制度概要と予算

「研究・実験補助者雇用制度」は、女性研究者支援センターが設置された平成18年度に導入され、現在まで継続して実施している制度です。初年度は科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」事業による自然科学系の女性研究者を対象とする制度として運用されましたが、翌平成19年度から本学の独自財源も加えることによって、本学に働くすべての女性・男性研究者を対象とする制度に改善されました。グラフ1に示すように、若干の変動はあるものの、平成21年度以降では、学内の予算が組まれ、延べ30名を超える研究者が利用しています。

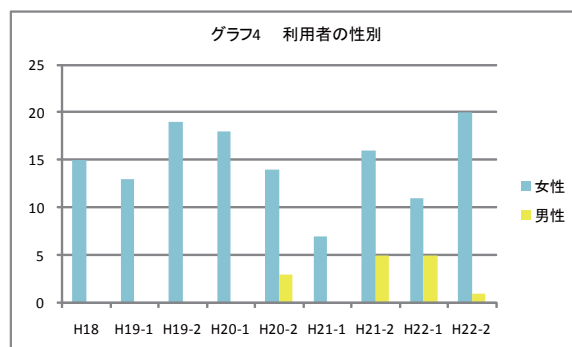


（2）利用者の傾向

グラフ2は分野別、グラフ3は利用事由の傾向を示しています。



分野別では、平成18年度から平成22年度までの総計で、医学系46.3%、理学系12.9%、農学系11.6%、工学系6.1%、薬学系3.4%、その他（人文・社会科学系）が19.7%となっており、やはり比率のうえでは医学系や自然科学系研究者の利用が多く、実験など研究場所が特定される分野の研究者にとって、この制度が「役立っている」ことを示しています。一方で、人文・社会科学系などの分野の研究者も毎回、数名が利用していますが、自宅に仕事を持ち帰ることの多い分野の研究者のリサーチ・ライフバランス支援には、この制度以外の支援の方法も検討する必要があります。また申請事由をみますと、育児が90%を超え、介護および介護・育児が7.5%程度にとどまっています。男女別では、グラフ4に示すように、男性研究者の利用も増えてはいますが、5年間の総計では90%程度が女性研究者の利用です。



今後とも利用者や応募者の意見を広く聞きながら、制度の改善を図っていく所存です。育児や介護で大変な時、ぜひこの制度の活用を検討してみてください。

（就労形態検討ワーキンググループ主査 押川文子）

子育て・介護と研究の両立の一助に

■利用者からの報告

山根 久代

利用当時：農学研究科園芸科学講座
果樹園芸学分野 助教

現在：同上

期間：2010年10月から2011年3月

9月に第一子を出産後、保育園入園までの半年間この制度を利用しました。私の研究分野は、実験対象作物の組織サンプルの採取、培養物の培地交換や生長計測、鉢植え苗の管理など毎日欠かすことのできない作業があります。この制度で大学院生3人を雇用し作業を分担してもらい、随時メールでやりとりしながら実験を続けることができました。産休・育休時にもかかわらず有用なデータを得ることができました。

実施研究は、近年の気候温暖化とも密接に関連する現象である温帯果樹の休眠に関する研究であり、未同定であった制御因子を単離しその機能を解析しようとするものでした。順調に研究結果が得られたため、雇用していた大学院生が学会発表をする機会を得ることができ、雇用者のキャリアアップにつなげることができました。また得られた研究成果を国際誌や国内誌で発表し、研究結果を広く公表することができました。



産休前より行ってきた一連の研究結果が認められ、復帰後も競争的資金を獲得することができ、研究者のキャリアを継続することができています。



三浦 美樹子

利用当時：ウイルス研究所 研究員

現在：島根大学医学部 助教

期間：2007年4月から2008年3月

利用当時は、1、2歳の年子の男子達を抱えて、長いブランクの後にポストドクとして復帰した直後でした。この制度で研究室の他の研究チームにいた大学院生を実験助手として雇用しました。利用時の私は、再々、保育園からの連絡が来ては途中で帰ったり、休んだりの状態でした。研究時間の確保に苦慮していた時期ですが、研究室の方々や補助者のおかげで、研究を継続することができました。

この制度を利用していた時期、American Journal of physiology にレビューをまとめる事ができました。私はこの制度のおかげで研究そのものの進展よりも精神的にとても支えられました。その後、多くのポストドクと同じく、プロジェクトの修了とともに全く別の研究を始める事になりましたが、継続して研究を続けてこられたおかげで徐々に学会発表等に参加できる様になり、科研費を獲得し、昨秋には研究で常勤職を得る事ができました。体力的にも精神的にも苦しかった時に、この制度を利用できた事で、こんな私でも研究を続けていいんだ！応援してもらえるんだ！と思えた事が、今の研究の継続につながっています。



延與 佳子

利用当時：基礎物理学研究所 准教授
現在：理学研究科物理・宇宙物理専攻
准教授

期間：2007年1月から2009年9月

利用当時は、一番下の子が小学生低学年でした。親の不在が多いためか、メンタルに落ち着かない状況で、何とか家にいる時間を増やしたいと考えていました。理論計算のデータ整理や作図だけでなく、研究会開催準備などのために、土日出勤していたのですが、研究補助を雇うことで細かい仕事をやってもらい、残業を減らすことができました。



私は理論研究者ですが、研究会開催は共同研究を進める上で非常に有効です。京都大学は立地的にも研究会開催に有利なのですが、子供がいると無理がきかず、どうしても開催に消極的になっておりました。しかし、研究補助者を雇用していた期間は、支援スタッフがいるという安心感で積極的に国際会議を開催することができました。気軽に海外出張が行くことができない私にとって、会議開催により海外研究者と密接に議論できたことは、今のキャリアに大きな寄与を与えています。研究を進める上でも、分野をリードする上でも、非常に大きな影響を与えました。

山本 憲

利用当時：附属病院放射線診断科助教

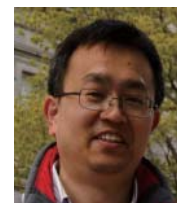
現在：同上

期間 2010年4月から9月

この制度の利用当時、私は磁気共鳴画像法(MRI)を用いて、ヒト脳の超高分解能撮影を行なう研究及び、MRIによる死後画像撮影を行なう研究を実施していました。丁度その頃に、保育園への送迎や家庭での育児分担が必要な時期でもあり、研究実施と育児の両立に困難を来す可能性がありましたが、この制度を利用することで、研究遂行時間と育児時間の両立の助けになりました。

利用当時に収集したデータを解析し、2011年5月にカナダ国モントリオール市にて開催された、国際磁気共鳴医学会にて研究成果について電子ポスター発表を行なうことが出来ました。また、この研究データを元に、さらに解析を深め、現在米国神経放射線学会雑誌への投稿に向けて、論文執筆を進めているところでもあります。

この研究テーマをさらに深め、かつ範囲を広げることで、脳MRI研究分野の今後の飛躍に寄与できるところがあると確信して日々の研究を実施しています。



※利用者の研究成果について、
詳細をホームページに掲載しています。
(<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>)

連載：研究者になる！－第34回－

まわり道でも迷っても、
その時その場でベストを尽くす
医学研究科・准教授 濱崎 洋子



第3回京都大学優秀女性研究者賞「たちばな賞」を授与頂いたことについてまず厚く御礼申し上げます。正直私は、研究者になる！

という強い想いで突き進んだ訳ではないのですが、逆に私の紆余曲折を記すことによって若い学生さんが各々の立場から何かを感じてくれればと思い、寄稿を引き受けさせて頂くことにしました。

修士課程でそろそろ進路を考えなければならない頃、このまま研究を続けたいと言う漠然とした想いはありましたが、博士課程への進学か就職かという選択について、現在の大部分の学生と同様に私も悩みました。結果、“この会社なら”と2社だけ受けたうち麒麟麦酒株式会社(当時の医薬事業本部)の臨床開発部に内定を頂きましたが、希望していた研究職ではなく、薬の候補を人に投与するプロトコルを立てて治験を行い薬として申請する臨床開発部での採用でした。正直ここでまた迷いましたが、とにかくポジティブにやってみようと思っし、全国の病院を飛び回り、文字通り社会に揉まれ、薬を世に出す過程の面白さや難しさを経験しました。その一方で、やはり基礎医学研究がしたいという気持ちを再認識し、悩んだ末に2年後大学院へ進むことにしました。そこまでやりたいなら、がんばれ浜ちゃん！と応援してくれた会社の仲間の励ましは、今でも私の大きな支えになっています。最初から腰かけのつもりでは得るものは少なかったかもしれませんが、しかしその期間少なくとも精一杯やったことによって、世の中の仕組みを知り且つ広い視野と人脈を築き、また今携わっている基礎研究と創薬との距離感を測る感性を養うことができたという点で、結果的に極めて貴重な経験となりました。

博士課程でお世話になった故月田承一郎先生は、“この世界で生きていけるかいけないか、それは君次第です。僕たちが手取り足取りすることはありません。博士課程は研究者として最初のラインに立てるかどうかが、試される時期です”と面接に伺った時に静かに、でもきっぱりと仰いました。安定した職を捨てても、とある意味悲壮感をもって当時の私には、無責任に良いことばかりを並べ立てられるよりもこの言葉はしっくりきました。ラボは最近流行りの褒めて育てる的な風潮でも、とにかく実験しろ、という感じでもなく、個々が大人とし

て自身に責任を持ちながらサイエンスを楽しむこと、そして学問をする大学人としての知性と教養の大切さを教えて頂きました。年上であれ年下であれ、すごいなと思える人達に会えたのも幸いでした。自分の力不足を感じて落ち込むことは度々ありましたが、逆に周囲との相対的な比較であくせくすることは殆ど意味が無いことに気付く、何より自分はこういうサイエンスをしたい、こうありたい、という確固とした理想像が見えたからです。

博士課程修了を控え次のステップを考え始めた頃、現所属の湊長博教授から、助教にと声をかけて頂きました。専門分野を変えたらまたゼロからのスタートか、とも思いましたが、これも何かの縁だ、精一杯やってみよう、と思い進路を決めました。当時私には、ラボのテーマとは別のちょっとした“やってみたいこと”があったのですが、湊教授はスタッフになったばかりの私にも、“君はスタッフなんだから、自分の発想があるならやってみなさい”と、京大の特徴とも言うべき自主性を尊重する大きな器でエンカレッジして下さいました。すぐには結果も出ず、分からないことも多く悔しい想いも随分しました。また、信頼して好きなことをやらせてもらっているからには何としてもお返しをしたいというプレッシャーは相当大きなものでしたが、必死にやればやるほど免疫学の面白さの虜になり、御蔭でこの時始めたテーマが現在の研究の柱になりました。決して効率が良いとはいえない選択をして異分野に飛び込んだからこそ、“自分にしかできない自分がやりたいこと”を寧ろ見出すことができたのかもしれない。

思えばこれまで何度も迷って立ち止まり、今も困難は多々ありますが、ある意味腹を据えて、自分が理想とする姿を目指してベストを尽くすということをただ淡々と続けているように思います。どんな世界でも、自分の力の及ばないこと、運・不運はあります。それを思い悩んで不安や不満を抱いたり、あるいは単に権利を勝ち取ろうとあくせくしたり、失敗を恐れて小さくなったりするよりは、周囲に感謝し自分の現状とも向き合っ、投資されるに値する自分になれるようまず自分が努力すること、そして研究・学問の楽しさ、仕事の中で自分が成長する実感を精一杯味わって前に進んで欲しいなと、学生さんをみていていつも思います。そうすれば、一見まわり道に見えるようなことも、すべて自分にプラスになっていくのだなというのが今の私の感想です。どんな時代も、それが道を切り開く一番の近道だと私は思うし、それを伝えられる教員になれたらと思っています。

Center for Women Researchers

〒 606-8303 京都市左京区吉田橘町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>